

メリメの文明論

—『コロンバ』、近代化、伝統

奥田宏子

はじめに

プロスペル・メリメ（一八〇三—一八七〇）の小説『コロンバ』は、作者がフランス人で舞台が地中海のコルシカ島である。基本的なこの組み合わせに、イギリス人大佐と娘リディアを配して、物語の骨格が出来上がっている。コルシカでは「山賊」が出るといふ話を聞いて、イギリス娘が冒険心に胸をふくらませて父親と島見物に出かけるのだ。

『コロンバ』発表の一八四〇年当時、コルシカは仏領であったが、地中海といつても地理的にイタリア寄り⁽¹⁾で、独自の文化伝統をもち、風土・習慣ともにフランスと異質な点が多いなど、この島はフランス人にとっての「辺境」であった。北部バスティア市立博物館で十八世紀のコルシカ地図の説明書を見たコルシカ研究者はそこに書かれた「この当時のフランス人にとってコルシカは日本と同じくらい未知の国だった」という記述について、「現代のフランス本土の住民にもいまなお（これは）該当するように思われる」と述べ、島がメリメ

の時代以降も長らく「辺境」であつたことを指摘している。⁽²⁾

イギリス娘リディアのコルシカ行の動機となつた「山賊」とは、フランスに限らず長らくヨーロッパが持つていた「原始的で暴力的」というこの島のイメージを凝縮したものである。⁽³⁾ 当時広く流布していたコルシカに対するこのステレオタイプを、本作品のイギリス娘も持つていた。そのリディアが出発前に想像していたのは、ロンドンの「セント・ジェームズ広場の自宅に、(コルシカ旅行から) 帰つてゐるアルバムを人に見せている：幸福な」(八) 自分の姿だつた。⁽⁴⁾

大都会に住む、空想癖のある、富裕階級に属する娘を、作者は「原始的」なコルシカに送り込み、彼女が期待していた「山賊」体験に似た体験をさせる。文明圏から来た深窓の令嬢は「辺境」の島での現地体験に、どう対処するのか。この作品で描かれるコルシカの「珍しい」民族文化は読者の異郷趣味を満足させ、⁽⁵⁾ ここで描かれる「野蛮」と「文明」の対決は読者の冒険心を満足させる。

コルシカの原始性の典型例として広くヨーロッパで知られていたのが、代々島に伝わるとされた「仇討」で、これをめぐつて考えを異にするコルシカ人兄妹が一組の主要な登場人物として登場し、島にやつて来た外来者リディアと交流する。彼らの間の人間模様を『コロンバ』は、コルシカ人そしてコルシカの近代化という問題意識のもとに語っていく。

長らく閉鎖的だつた島が外部との接触の中で、過去の伝統をどのように守り、あるいは現在をどのように造りかえていくのか。軽妙な語り口で読者を楽しませながら、他方で、文明とは何か、伝統とは何か、近代化とは何か、という課題に向き合うメリメの文明論として『コロンバ』を読み解いていきたい。

リディア―文明と幻想

イギリス軍人サー・トーマス・ネヴィル大佐と娘リディアの紹介で『コロンバ』は始まる。「イギリス陸軍中でもそうそうたる士官として知られた」(四) 大佐は、物語の冒頭設定で愛娘を伴ってフランスのマルセイユはボーヴォ・ホテルに投宿したばかりである。親子はイタリア旅行を終えてイギリスへの帰路、南フランスのこの港町に立ち寄ったのである。

一人娘リディアは、今見てきたイタリアを楽しんだところか「煙を吐いているヴェスヴィアス(山)も、バ―ミンガムの工場の煙突よりちよつとまし」(四) だったにすぎないと不満を抱えている。遺跡の宝庫で十九世紀のこの時期すでにヨーロッパ第一の観光国だったイタリアだが、この娘の趣味に合わなかったのだ。「イタリアに対する彼女の最大の反感は、この国には地方色が、特性が、欠けているということだった」(四)とメリメはその理由を解説している。

イギリス娘リディアのイタリア旅行への動機について、つぎのような一節もある。イタリアに行ったのは、「アルプスの彼方に、自分より先には誰も見たことがないようなものを発見」(四) できると思ったからだだった……ところが行ってみると「いたるところ同国人のために先を越されて……まだ知られていない何かに出くわす望みは全く絶えた」(四) というのだ。リディアは未踏の地への、それも同国人に先んじての旅を求めていたのだ。父親もイタリアに失望していた。大佐の唯一の趣味だった「狩猟の楽しみ(について)……貧弱きわまる」

(五) 国だったのだ。「ちゃちな赤鷗鵠を五、六羽射止めるのに、ローマ郊外を陽に照りつけられて四十キロも走りまわらなければならなかった」(五―六)のだった。またこの父親は「娘の目を通してのみ事物をながめる」(五)という習性を身につけていたため、「イタリアは娘を退屈させたという大いなるあやまちを犯した」がゆえに、「世界中で一番退屈な国」(五)だった。

イタリア旅行について物足りない思いをもてあましている親子の前に、タイミングよく、ある人物が現れた。コルシカで六週間を過ごしてきたというかつて副官だったエリス大尉だ。この人がコルシカ名物の「山賊」についての体験談を面白おかしく語って聞かせると、リディアはたちまち活気づく。「その物語たるやローマからナポリへ行く街道でさんざん聞かされた山賊の話とは似ても似つかぬという特筆すべき美点を持っていた」(六)。エリス大尉の「山賊」談は、リディアの興味を掻き立てた。コルシカは獵と獲物にかけて文句のない土地だというから、父親も身を乗り出した。エリス大尉とのこの時のやりとりはつぎのように描写されている。

お茶になって、大尉はふたたび遠縁の仇討の話でリディ嬢をすっかりよろこばせた。最初の物語にさらに輪をかけたかわった話である。ついに大尉は彼女に向ってコルシカの荒涼たる、珍しい風物と、その住民の一風かわった性質、彼らの客好きなこと、原始的な風俗を描いてみせることによって、コルシカに対する相手の興味を絶頂に達せしめることに成功した(七)。

ここで言及されている「仇討の話」、その是非をめぐって『コロンバ』は展開することになる。したがって

これはメリメが敷いた一つの布石である。「仇討」も「山賊」も、危険、スリル、無法、を暗示する、ヨーロッパが当時コルシカと結びつけていた典型的なイメージであり、リディアが求めているイタリアで得られなかった「地方色」がまさにこれだった。

「野蛮」への嗜好は行儀の良い都市生活を営む「文明人」のもつ倦怠感や、そうした生活が抑圧している混沌への回帰願望の表れであり、「山賊」とは、ロンドンの快適なソファの対極にあるもの、飼い馴らされた「文明人」が密かに夢想する非文明への越境の表象である。そして父親が趣味とする狩猟も人類史のもっとも原初的な活動への回帰願望を再演するものだ。自ら構築してきた文明の破綻幻想をどこかに隠しもつ親子像が描かれていると考えてよいであろう。

父親は、翌朝、早速にコルシカ行を娘に提案した。彼女に異存があるはずもないと分かっていたが、娘の覚悟のほどを確かめてみようと、島が「未開」状態であること、「女の身」で「そんな所を旅行する」には困難が伴うこと、などの警告を父は発してみる。そんな「脅し」は、「彼女にはなんのききめもなかった」(八)。「彼女は何物も恐れなかった(八)」。「なにしろ、イギリス婦人でコルシカへ行ったものは一人もないのだから、彼女はどうしても行かなければならない。そしてセント・ジュームズ広場の自宅に帰って、自分のアルバムを人に見せる。なんとという幸福だろう」(八)。

コルシカへ渡るためにマルセイユで手配した小さな帆船に、「船長の遠縁」というコルシカ青年が乗ってきた。⁽⁷⁾ 本作品で主要登場人物となるコルシカ人兄妹の兄にあたるオルソ・デルラ・レビアである。⁽⁸⁾ フランスで軍務についたのち、今、故郷の村に帰るところであった。背は高く顔色は陽に焼け、黒く鋭く切れ長の目を持ち、

率直で俊敏な風貌をしたオルソ青年は、「先祖にカポラル（島の護民官の一種）を輩出した」旧家出身、これから問題となる「仇討」にまつわるコルシカ二名門の一方に属する若者だった。

目の前に現れたコルシカ青年に対し、どうせ「どこかの馬の骨」（一〇）とイギリス娘はタカをくくった。コルシカ青年のほうもイギリス人大佐の威張った態度にムツときて、「おうへいな男だね、お前さんの客人のイギリス人は」と船長に耳打ちした。船長は、

人差し指を左の目の下にあてがい、両方の口の端を引き下げてみせた。合図の言葉の分かるものにとつては、これはすなわち、このイギリス人はイタリア語が分かると言うことと、かわり者だということを意味している。青年はちよつと苦笑して、マテイ（船長の名）の合図への返事のかわりに額に手を当ててみせた。イギリス人というやつは、ことごとく頭の中に妙なものを持っているよ、というつもりにちがいない（一一）。

初対面で親子は現地青年を見下したようである。「未開」に惹かれてコルシカに行く「文明人」は島民ですでに劣等視している。コルシカ人側も、高慢な外来者にジェスチャー付きで応戦している。島民も外来者も、相手に気を許していない。それぞれに先入観があり、自負があった。イギリス人がコルシカ人に偏見をもっているように、コルシカ人もイギリス人に偏見をもっている。

とはいえ同じ船に身をまかせる身、否定的な第一印象をお互いに拭って彼らは友人となってコルシカに上陸

する。「仇討」の島へと小説の舞台は移ったのだ。そして仇討を期待されるオルソはそれを遂行するのか。

物語はこの問題を、オルソにおける「コルシカ人意識」の問題として描くことになる。年少で島を出て、イタリアでの中等教育を経てフランスの士官学校に学び、フランスで軍務についた経歴をもつオルソは、いわば故郷コルシカへの帰属意識を失いつつある青年として描かれていく。メリメの国フランスで合理精神に触れた彼は「自由主義者」(三二)になったというわけである。「自由主義者」は、コルシカの伝統をどう受け止め、またどう否定するのか。

仇討に関するオルソの葛藤は、すでに船中から始まっていた。長年の不在によって、自分の中のコルシカへの愛着に変化が生じていることを船の中で自覚していたのだ。上陸したら、「マキ」と呼ばれる土地特有の森を案内したい、と彼はネヴィル親子に申し出たが、⁽¹⁰⁾すぐに「もつとも私自身がマキや山を忘れてしまっているかもしれないのですがと、ため息と一緒に……付け加えた」(一六)のだ。故郷への帰属意識を必らずしも捨てたいと望んではいなかったことが「ため息」から伝わってくる。

メリメは、コルシカの仇討伝統について、このように述べている。「諺になるほど有名な彼らの情熱(仇討)を攻撃するかあるいは肯定するか、いずれかの態度をとることなしに、コルシカ人について語ることは不可能である」(二七)。仇討がコルシカ人意識に関わる問題である限り、コルシカ人を語るとは仇討への態度を語ることだと作者は言うのだ。

オルソ——文明と情熱

オルソの父は二年前に島で暗殺された。コルシカではその場合、息子に復讐義務があるとされたが、本作品の青年は仇討に疑問をもっている。仇討は彼にとって「同国人の際限のない憎しみ合い」（二七）、「貧しい人々の決闘」（二七）に思えた。だが農民の場合には許されてよいという但し書きが付いていた。オルソにとって自分がコルシカの上層階級に属するということは重要であった。仇討は、自分のようなエリートに相応しくないという判断があった。

イギリス娘リディアは別の期待をもっていた。島に着いた早々、青年が父親の仇討義務を担うことを知り、それ以来、彼女の中でオルソは「勇士」に変貌し始めていたのだ。この一件は、

（オルソ）にたいするリディア嬢の態度および心持ちにいちじるしい変化を生ぜしめた。この時以来彼はロマネスクなイギリス女の目には小説の人物としてうつったのである。あのむぞうさな様子、あけすけの上きげんの調子は、最初はいちじるしく彼女の心証を害したが、今や彼女にとって、いちだんと尊敬すべき長所となって現れた。∴オルソは彼女にとって表面の軽薄さの下に広大無辺の計画を蔵した、一人のフィエスコとして現れたのである（二六）。

オルソの価値は彼女の中で急騰した。オルソその人でなく、フィクション化されたオルソとして。「フィエスコ」とは、フリードリッヒ・シラー（一七五九—一八〇五）の戯曲「フィエスコの叛乱」（初版一七八三年）に登場する、十六世紀ジェノヴァの青年貴族の名である。ドイツ作家が描く悲劇の英雄のように、オルソはリディアの空想の世界で輝き始めたのだ。だがそんな矢先、オルソが仇討に前向きでないことを彼女は知る。それは大いなる失望であつた。

ところがリディアは、いかにも仇討の撲滅を願う人のように振る舞うのだ。「心ひそかに一つの高貴な使命をみずからに」（三〇）課し、「山育ちの熊を文明開化に導き、この男を生まれ故郷なる島に呼び返した不吉な計画を放棄せしめる」（三〇）使命をもった者であるかのように。つい先刻、「復讐者オルソ」の勇姿を「尊敬」の目で見ていたはずの人が、今はオルソを仇討という「破滅の淵」（三〇）から救い出すと意気込んでいるというわけである。「ひとりのコルシカ人を改心せしめること」は、今では彼女の「名誉」だった…。

一人の人物に、両極端の相反する願望をメリメは盛り込む。今後、リディアは、一方でオルソの復讐を願い、他方でそれを制止しようと動くことになる。矛盾する二つの期待をもつてオルソに接するリディア。すでに見た、ロンドンの都会風の居間で「野蛮な」コルシカ体験を語ろうと夢見るリディアと、符号は確かに合っている。

さて、コルシカ上陸後しばらくして、仇討義務が待っている故郷の村にオルソ青年はいよいよ帰ることとなった。因習が色濃く残る村に帰って行くオルソに、村では「たぶん野蛮な偏見でとりかこまれる」ことだろうが、「抵抗する勇氣」（三六）を持つてほしいと言うリディアに彼は「深く胸にこたえた様子で」（三六）こ

妹のこの様子を見た兄は、「パテール（天なる父）しか知らない山の中の小娘をこんなに感動」（四二）させたダンテの詩の力に感服したものの、「妹の詩人的素質をまざまざと思ひ起こさせられて・大いに困惑」（四三）する。コロンバは、じつは島の口承伝統を受け継ぐ詩人で、故郷の村ビエトラネーラと「周囲二里四方の土地では第一等のボチエラトリス（即興詩人）」（四二）だったのだ。

「コルシカに女の即興詩人がいるのをうわさにきいた：いつかは一つききたいものと、死ぬほど願っていた」（四三）とリディアは、今度はコロンバに朗吟を願ひ出るが、兄のオルソがそれを許さない。イタリア詩人ダンテの偉大さに比べて、「山の中の小娘」にすぎない妹の唄など聞くに値しないとオルソは考える。「コルシカのバラッタ（唄）ぐらい退屈なものはありませんよ、ダンテの詩のあとで、コルシカの歌を朗吟することは故国を裏切ることです」（四三）。大陸文化を崇拜し、島の伝承を卑下しているのだ。

リディアがなおもコロンバの唄を懇願したので、兄はついに折れた。三人の前でコロンバがコルシカの唄を披露すると、感動したリディアは歌詞を書いてほしいと頼む。だが正書法を知らないコロンバは歌詞をうまく書けない。妹の「無教養」は「兄としての誇り」を傷つけ、オルソは「地獄の責苦を」（四三）を味わった。「島の唄」は本来的に「書かれ、読まれる」ものではなかったが、「書き言葉」に権威を置く兄は口承伝統を蔑視していた。兄は妹が恥をさらしたとしか思えなかった。

コロンバはここでは島の「無知」と「未開」の具現化として描かれている。外観も「原始的」で、衣装や立ち居振る舞いは「野趣をおび」（五九）、瞳は「異常な輝き」（四一）を放って悲しく陰鬱であった。

さて、仇討に話を戻すと、物語は、兄妹の父であるデルラ・レビア家の家長ギルファチオ大佐が「二発の弾丸に貫かれて」（五三）非業の死を遂げた…という事実以外、殺害者の特定を困難としたまま、仇討の是非を語っていく。暗殺現場の検証が行われ、その調査結果が詳細に伝えられるが、敵方バリッチ二家の仕業とするコロンバの主張を証拠づけることはできない。被害者の死亡状況を、メリメは推察に推察を呼ぶ錯綜する状況下に置いている。決め手となる重要証人を彼は死亡させる。解決の鍵はこれでは完全に失われてしまったのだ。

こうなるとコロンバが主張する仇討について、読者は懐疑の念をもったまま、その展開を追っていくことになる。彼女は宿敵バリッチ二家以外に下手人はありえないと固く信じて疑わないが、バリッチ二家はむろん無罪を主張している。兄は父殺害の知らせを受けたその時点で、「いっこう確たる証拠があるわけではない」（仇討の）主張は取るに足りない」（五八）とすでに大陸から妹に手紙を書き送っていた。

作者メリメは旧家の確執について、つぎのような警告をしている。「多くの家は古い習慣のために憎みあっていることがあり、その憎しみの元の原因に関する言い伝えさえ完全に失われてしまっていることがある」（四七）と。原因が失われて憎悪だけが継承されて復讐に至るケースがある…というわけだ。

コロンバ——文明と伝統

「文明人」でありたいと熱心に努めるオルソは、先輩の「文明人」リディアから文明人としてのお墨付きを

得たいと切に願っていた。「野蠻」な妹を恥じる彼が、妹の印象をリディアに尋ねる場面を見てみよう。

コロンバに対する彼女の好意は「あなた（オルソ）以上よ、だって、ほんとにコルシカの方らしいのですもの」（六〇）がリディアの答だった。地方色を好むリディアらしい答であるが、これがオルソに向けられた台詞であることは注意を要する要するだろう。妹のほうが兄よりコルシカの人らしい、だから妹のほうをいっそう気に入っている……というのだから。

彼女はこうも言う。「あなたは文明開化になりすぎた野蠻人」（六〇）だ……と。大陸で近代精神を習得した彼は「文明開化」したのだが、その彼は再度ここでは「野蠻人」だ。彼女自身、彼のコルシカ性脱却を支援してきたはずであるし、本人オルソもある程度の目的達成を自認していたはずではないのか。⁽¹²⁾

文明度・野蠻度を測る権利があるかのごとくりディアは彼にラベルを貼る。そして「文明開化になりすぎた」とは、文明開化「し過ぎてはならない、し過ぎてほしくない」というメッセージを含む。要するに「文明開化もほどほどに」というのだ。「野蠻」を好む彼女の潜在的な願望が漏れ出たのだが、同時にここには「野蠻人は野蠻人」らしくという、文明人の優位保守の姿勢が見える。

コルシカ人にはコロンバのようでいて欲しい——ローカル・カラーを保守してほしい——という彼女の願望は、オルソへのつぎの台詞によく表現されている。「お妹さんの陰忍な態度をごらんさない。あなたの良いお手本ですわ」（六〇）。ところで妹コロンバを「良いお手本」に……とは、「復讐に邁進しなさい」ということを実質的に意味するはずだ。

皮肉にも、物語のこの段階で、オルソのリディアへの気持ちに恋情が入って来る。恋愛感情の本来的な幻想

性に鑑みて二人の間の大きな誤解と齟齬が彼の恋心を促進したという心理面はあるかもしれないが、それはそれで置いておくとして、すでに長く彼の内にあった恋情がここに至って隠せないところまで育っていた。

この間、オルソは、同時進行的に、妹が発する仇討へのプレッシャーにあらがっていた。リディアのサポートを、彼はこの面でも必要としていた。文明化への情熱と恋愛の情熱が混然一体となつて感情を高揚させていた。「あなたのお国の島の空気は熱病をおこさせるばかりでなく、人を氣ちがいにすると見えますわね」(六三)と、リディアが遠まわしにこの時点で言うのと、オルソは的外れな反応をし、「あなたのおっしゃるように、氣ちがいになることを防ぐのに、たよりになるのはあなた一人だったのです。あなたはほくの守り神でした。そして今は……」(六三)と口ごもった。

オルソの心をどう読んだのか、リディアはここで彼に指輪をプレゼントする。エジプトの甲虫の形をした指輪には、象形文字で「人生は戦いなり」という格言が刻まれていた。これが復讐という「戦い」から脱退しようと思死な男への適切なメッセージでないことは明らかだ。指輪を渡しながら、これは「わたしの護符」、「コルシカ式の悪い考え」(六五)が湧いたらこれを見てほしいと言うが、刻まれた文字は逆の意味を伝えている。オルソは応えて「あなたのことをきつと考えます。ミス・ネヴィル、そしてきつと自分に言い聞かせます」(六五)と、また見当外れの約束をした。

二人の間のすれ違いは滑稽そのものだ。だがオルソとてこれに對して不安をもたなかったわけではない。「彼女の嘲笑、なかなかなく彼女の軽薄な調子が彼の胸につかえていた」(六六)。リディアのダブルスタンダードがオルソを翻弄していた。彼女の「嘲笑」、彼女の「軽薄」は、彼を混乱させた。だがオルソは、こうした

不安を、自己抑制で越えていこうとする。メリメはあくまでもストイックなオルソを描いていく。

いちじ、彼はこの若いイギリス婦人の起ち居振るまいのなかに愛情の萌しを読み取ることができるような気がしたことがあった。けれども、今では、相手の冗談のために出鼻をくじかれて、自分の心に、自分は彼女の目には単なる知り合いの人間にすぎなかったのだ、やがて忘れられてしまう知り合いに過ぎなかったのだ、と言って聞かせた（六六）。

リディアの二心に混迷して、オルソは防衛態勢に入ったようだ。指輪も助言も「冗談」だったと思うことにした。だが賢明なこの決心は長く続かず、かえってリディアにコントロールされていく。他方、リディアは何を考えていたか？

なぜまたあの方のことなんか考えるのかしら？……だって旅先でちよつとお知り合いになっただけなのに……わたしはコルシカに何しに来たのかしら？あらいやだ！あの方を愛してなんかいないわ……そんなことあるのですか、それに第一、そんなこと出来ない相談だわ……（七〇）。

作者もこれを補充して言う。

(私) 彼女の独白をひきつづいて記すことをくわだてないであろう。その独白のなかで彼女は百べん以上も、デルラ・レビア氏は自分にとって何物でもなかったし、現在でもそうだし、これからさきも永久に何物でもないという言葉をくりかえした(七一)。

ここで描写されるリディアの恋愛心理については、若い娘が恋を初々しく我が心に打ち消しているようにも取れるだろうが、彼女が愛などまったく想定外と考えていると取るほうが流れに沿っているだろう。だがメリメはリディアの気持ちに関して、得意とする曖昧さの技法をフル活用し、確答は与えていない。そしてオルソのほうは、一貫して正真正銘の「恋する男」として描いていく。

そこで妹のコロンバが、不安な兄の応援にまわった。「どう見てもいい縁組ですわ」(七一)と結婚を匂わして兄を励ますコロンバ。それにデルラ・レビア家の家柄からしてリディア側に不足はないはず、と家柄を出して自信をもたせた。兄に仇討をさせるためにリディアを動員しようと考えたのだ。リディアの影響力を利用する、リディア好みの地方色を仇討推進に使う、とコロンバは企てる。神妙に島の伝統継承者として振る舞うコロンバの逞しさとしたかさを、メリメは物語の後半部で見せて行く。

「伝統」の意味はコロンバによって融通無碍に読み替えられる。それは復讐への口実となり、復讐そのものが目的化してしまう。彼女が功利的に「伝統」を活用し、必要に応じてそれを演出するさまを描くことにより、メリメは、純粹な「伝統」というものは存在しない、純粹な地方色などというものもない、「過去」は「現在」によって再構築され続けている、と言っているのであろう。

コロンバの「伝統」(復讐)が、彼女自身によって再構築される様子をもっともよく表現するのが、「馬の耳切り」事件である。復讐に踏み切ろうとしない兄に業を煮やした彼女が、復讐への緊迫感と契機を創出するべく、闇に紛れて、ある夜、家を抜け出して敵方の馬の耳を切る。翌朝、耳から血を流した馬を発見した敵方は無言の挑戦を悟り、これをきっかけに、くすぶっていた復讐劇は一挙に最終段階での実戦に向かっていく。怨念だけでは埒が明かないと、コロンバが実際的手段に訴えて、くすぶる復讐に火をつけたのだ。

この一件は、含蓄に富む重要な事件である。メリメはそれを丁寧に描いている。だがそこに嫌味はなく、コロンバが「悪事」を犯す、という非難めいたトーンはない。この流血事件は根柢の弱い「伝統」(この場合、仇討の義務)を単に強化したにすぎないのか、それともそもそも存在しない根柢を創出したのか。前者なら読者の許容範囲内の創出かもしれないが、後者なら読者の許容範囲を超えてしまうだろう。いずれにせよ、この事件は事態を急展開させ、両家の息子を決闘へと突き動かした。オルソは腕に負傷を負い、敵方の二人の息子はオルソの銃に倒れて死んだ。結果的にコロンバは執念を晴らしたのだ。結果的にオルソは父の仇討をしたのだ。しかるべき人が殺されたのかどうか、読者は確信をもてないまま…。

「マキ」――未開か文明か

物語の舞台は、大詰めで、「マキ」と呼ばれるコルシカ特有の生態系へと移動する。それは島の自然の表象、ある意味、コルシカの独特な風土のシンボルである。物語の冒頭近く、オルソが島に帰る船の中でネヴィル親

子に故郷の案内を申し出て、「わたしどものマキと山をご案内させていただきますなら」（二六）と言った、あの「マキ」である。「マキ」について、次のような説明がされている。

「どうです。この林とマキをごらん下さい。：何かどじを踏んだ人間でも、ここなら十年くらいは憲兵や選抜兵に捜されずに太平楽で暮らすことができますぞ。この林のつづきがヴィザヴォナの森ですがね、ボツコニャーノかそれとも近所に味方さえいれば、何一つ不自由することはありませんよ。」（七二）

「マキ」は外界と隔離された場所、憲兵や選抜兵など外部の力（警察力）の届かない空間だというのだ。

『コロンバ』で「マキ」が重要な役割を果たすのは、一つには、ここに妹コロンバの復讐計画を陰で支える地元民が隠れ住むからである。「近所に味方さえいれば、何一つ不自由することはありません」と言っているように、彼ら「隠れ住む者たち」の食糧その他は、「近所の味方」が調達する。コロンバも食糧をたびたび森に運ばせている。何らかの事情でそこに逃げ込む「おたずね者」を、「マキ」は匿う。そこはいわば無法地帯であり、考えようによっては一種の「聖域」にもなりえた。

外部世界が近代化しても、それを寄せ付けない、先祖代々から受け継いだ大地、と「マキ」を考えることもできる。この作品の「マキ」には、十歳の少女キリナと口笛ひとつどこにでも姿を現して案内役を務める忠犬ブリュスコが原始状態に近い姿でひっそりと住んでいる。彼らはコロンバの仇討プロジェクトの小さな助手だった。犬と少女は「マキ」の一切を熟知する子供と動物として描かれ、「マキ」という大自然の一部である

かのように超人的に出没する。またそこには、仇討となれば飛び出して行つてコロンバを助けるべく待機する「おたずね者」たちが潜伏しており、コロンバが用意したパンや食べ物、この少女を介して彼らへと運ばれた。

「マキ」はオルソとリディアという一組の「文明人」男女の魂を寄り添わせる場所ともなった。彼らは互いを隔てる厄介な距離を、この空間で縮めた、または縮めたかに見える。物語の最終段階で、敵対するバリツチ二家の息子が発砲した弾でオルソは腕を負傷するが、負傷した彼はコロンバの支援者の「おたずね者」らによつて人目を避けて「マキ」に運び込まれた。「かわいた石を積み上げた小さな壁をめぐらせて用心深く火影を隠した焚火の側らに、羊歯をつみかさね、その上にピローネ（外套）をかぶつて」（一八七）真つ青な顔のオルソは横たえられた。

この隔離された空間で、妹コロンバの手配により、負傷した、恋するオルソは、リディアと対面した。銃弾を受けた腕の痛みに顔を歪めているオルソ。コロンバは兄の手に、必死で抵抗するリディアの手を「ぐんぐんひっぱつて……とうとうそれを兄の手の中に握らせ」（一八九）た。「すぐに手をひっこめて……口のなかでもぐもぐ言つた」（一八九）リディアと対照的に、「オルソは夢ごこちであつた」。かねてから兄とリディアの結婚を推進するべく目論んでいたコロンバが、ついに実力行使に出て、二人の手を「マキ」で結び合わせたのだ。読者としては、リディアがここで抵抗しているのが気になるところだ。作者はいつもの「斜に構えた」姿勢で臨んでいるのだ。

コロンバは、彼ら二人の奇妙な心理的ずれを無視して、「マキ」での二人の親密な「触れ合い」を用意した

のだ。日が沈み、あたりが暗くなって鬱蒼とした「マキ」の中を、コロンバはオルソの元へとリディアを引っ張っていった。暗くなった「マキ」の道なき道を、兄が隠れている洞に向かってどんどんリディアを引っ張って行くコロンバ。不安になって、もう引き返したいと言うリディア。

弱音を吐くリディアをコロンバは、「山へ逃げ込んだ連中が見たいっていつていらしたじゃありませんか！」と言って一喝した。「山賊を見たい」といつてコルシカに來たのであるから、コロンバの一喝もやむをえまい。「野蛮」に憧れる、都会の娘の根性を試すかのように、「あなたが常々見たかったもの、体験したがっていたものを体験させてあげましょう」とコロンバはリディアを引っ張り回した。

「マキ」の穴倉のような茂みに、痛みに耐えながら横になっているオルソを目の前にしたリディアの反応は、つぎのように描写されている。「彼女は、今はじめて、山へ逃げ込んだ男たちの蓬々たる頬髯と装束に地方色のありすぎることを、発見したのである」（一八八）と。地方色を求めていたが、現実に見る地方色は、予想に反して壮絶すぎたのだ。そもそも彼女が出会いたかった「山賊」とは、空想の世界でロマンチックに脚色された「山賊」というフィクションだったのだから、リディアは現実に対峙できない。

オルソにとって、だが話は別であった。全力をふり絞って彼がリディアに愛を告白できたのは、「二人さし向かいでマキの真ん中」（一九二）に身を置いたおかげだった。だがオルソに愛を告白させておきながら、その直後、リディアはみずからの帰国を匂わせた。「お発ちになるのですか、ネヴィルさん？ その言葉だけはまだ言わずにおいてください」（一九一）と懇願するオルソに、彼女は言い放った。「だって、どうしよう……父だって年中狩りをしているわけにもゆきません……発ちたいと言っております」（一九一）と。

打撃を受けたオルソは、だが自分には「このいまましい国」(一九二)にリディアを留めおく権利はない……と思う。そこで、弱気な兄を妹コロンバは、積極策に出て助けようとする。「マキ」ですべてのお膳立てをしたのに、こんなことでは埒が明かない、兄とリディアを何としても結婚させなければならない。リディアをそのためには攻略しなければならない。「ねえ、とコロンバは相手(リディア)の耳に口を寄せてささやいた。兄は愛されるだけの値打ちがありません。あなたもいくらか愛しているんでしょ?」(一九九)。オルソが「文明人」リディアにあからさまな劣等感をもっているとすれば、コロンバは「文明人」を主導している。

コロンバがリディアを主導するもう一つの例がある。「マキ」に入ってきた捜査隊から逃げ遅れたリディアは、捕虜として牢屋に入れられるが、そこへ連行されたコロンバが入ってくる。子供のように泣きじゃくるばかりのリディアに彼女が放った台詞は、「さあ、リディアさん……子供みたいに泣くんじゃありません。まあこれが冒険というものですけど。」(一九九)だった。コロンバはこの外国人がスリルを求めてコルシカに来たことを、一時も忘れてはいなかったのだ。「冒険を求めている貴女は、これくらいの怖い目は覚悟のうえでしょうにね」とコロンバは言いたいのだ。

誤解とすれ違いに満ちた、リディアとオルソだが、メリメはこの物語を二人の結婚というかたちで終焉にもつていった。結婚が決まった時点で、オルソは「マキ」の「おたずね者」たちの今後が心配になった。「マキ」のおかげでリディアと結ばれることになり、「マキ」で負傷したわが身を介抱された。だが「文明人」と結婚することになった今、「マキ」をこのまま放置してよいのか、と思ったのだ。「おたずね者」たちに向かって彼

は、「マキ」的存在からの脱出を説いた。

「みんな、きいてくれないか……きみたちは、よくない商売をやっている。あすこに見えるあの広場（しおきの行われる場所）で生涯を終わるはめに立ち至らないまでも、まあ一番上等なところで、憲兵か何かの鉄砲の弾にあたつてマキの中で倒れるくらいがおちだ」（二〇四）。

「おたずね者」たちにこの説法は無意味だった。どこで死んでも死ぬことに変わりはない、寢床で熱病で死ぬより「マキ」で死んだほうがまし、「大氣を吸いつけているわれわれには……靴をはいたまま死ぬくらいいいものはない」（二〇四）などの理由を挙げて、「マキ」生活を彼らは大いに弁護した。

「おたずね者」たちはまた、こう意見した。「趣味を解し学問もある（オルソのような）お方が、現に、マキの生活を味わっていないながら、われわれのようにマキの生活を送る決心がつかなかったというのは、まったくふしぎですよ」（二〇五）と。「マキ」が表象する非「文明的」なコルシカから完全に脱却した今、「マキ」的人生を送る同胞を説得する……と意気込んだオルソだが、効果はなく、かえつて反論された格好である。

「おたずね者」にしてみれば「浪人の生活ほど愉快な生活があるでしょうか？」（二〇五）と言うのだ。彼らは「マキ」的生活の自由を謳歌する。「この国のようないい気候のところでは絶対の自由が味わえる、その魅力にどうして無感覚でいられるのですかね？」（二〇五）と彼らは逆にオルソに問う。彼ら「おたずね者」はまた、オルソとりディアの結婚にまるで異議を唱えるかのように、「まったくですよ、オルソさん、山に逃げ込

んだ者の生活に比肩しうるものはありませんよ。いやはや！なんとかいうイギリスのご婦人さえいなければ、あなたもおそらくわれわれの仲間入りをしておられたでしょうにな」(二〇六)と言う。オルソに「マキ」(コルシカ)を捨てさせたのはリディアだ、と彼らは考えているのだ。

おわりに

「文明人」になろうと邁進したオルソと、「文明人」ならではの越境願望をもったリディア。二人の思いは最後まで食い違ったままだった。妹コロンバは一方で仇討自体を次第に目的化していった。物語は「文明」人と「未開」人の力関係を描き、それが逆転するさまをも見せてくれた。

兄の結婚によって花嫁リディアから来る収入を資金に、実家の改造・拡大を企てたコロンバは、もはや近代経済に縁のないコルシカ人ではない。⁽¹⁴⁾彼女は物語が閉じられる直前、さらに飛躍的に変身する。新婚の兄夫婦と渡ったイタリアで唐突に「文明開化」を宣言し、「理性の人」と自己規定したのだ(二〇九)。

「だんだんしこまれて」、男性に「腕を貸してもらったり、帽子をかぶったり、流行の服を着たり、装身具もいろいろ」(二〇九) 買い揃えたコロンバは、「もうすっかり山の女ではありませんわ」(二〇九)、「匕首よ、さらばですわ…今では扇子をもっています」(二一〇) と脱コルシカを言い放つのだった。島の古い伝統を象徴する「匕首」を「扇子」(パリ社交界の華やき)に持ち替えたのだ。メリメは、そのコロンバに画策させて、オルソとりディアを物語の最後に結婚させている。

作品発表当時、コルシカがフランスに併合されてから七十余年の歳月が経っていたが、島の近代化・文明化という問題を扱う当作品の結論が提示したのは、オルソトリディアという齟齬をもったカップルの誕生と、急にパリ風ファッションを最終場面で取り入れたコルシカ娘コロンバの皮相的な「文明化」である。終盤で彼らをさらにメリメは島外に移住させている。このようなハッピーエンドが不満であるのは明らかである。

十九世紀初頭のコルシカが抱えていた最大問題としての近代化について、ある限界をこの不満なハッピーエンドは感じさせる。だがその限界はフランスの同化政策者が語るような限界とは性質を異にするものと思われる。それはむしろ近代化の諸問題に対する作者の困惑から滲み出たものに思われるのである。

「伝統」と「文明」の双方が渦巻く磁場の中で生きた兄妹の人間としての姿を、メリメは『コロンバ』で直視した。この作品が行政官メリメの「コルシカ報告書」でなく、文学作品である所以が、おそらくここにあるだろう。

フランスにとって植民地化の対象であったコルシカに、遺跡調査官つまり政策者の任で赴いたのだったが、メリメはあくまでも作家の目でそこに生きる人間の矛盾と限界を描いた。「文明人」のダブル・スタンダードを暴いてパリの読者を笑わせ、「文明人」としての自らにも距離をとる、それがメリメの文学的スタンスであった。

注

- (1) コルシカは一七六九年、フランスに併合された(ジェノヴァ共和国と締結したヴェルサイユ条約)。古代にはローマ、中世にはイタリア半島諸国家(ビサやジェノヴァ)の支配下にあった。長谷川秀樹『コルシカの形成と変容―共和主義フランスから多元主義ヨーロッパへ』(三元社二〇〇二年)では、イタリア支配時代が長く、その影響が強かったため、併合後の「フランスの文化・社会的統合は容易ではなかった」(五〇頁)ことが指摘されている。
- (2) ジャニース・レスッチ『コルシカ島』長谷川秀樹・渥美史訳(白水社一九九九年)の訳者の「あとがき」(二七一頁)による。「現代の」とはこの訳書出版の一九九九年であることを付言しておく。()内は筆者の加筆(以下同様)。コルシカ史についてはPaul Arrighi *Histoire de la Corse*, Paris: Presses Universitaires de France, 2003を参照。
- (3) この時代のコルシカ・イメージは、(1)暗殺と復讐と恐怖の島というネガティブなもの、(2)否定的な通説を覆してポジティブな面を説くもの、の極端な二派に分かれていたが、後者は例外で前者の否定派が圧倒的だった。コルシカ像形成の研究にJames O. Mayo, *Images of Corsica in France*, MA thesis, Brigham Young University 2009がある。
- (4) テクストはProsper Mérimée, *Colomba, Romans et Nouvelles*, Éditions Gallimard, 1951を使用した。本文中の引用はすべて杉捷夫訳『コロンバ』(岩波書店 一九六七年)を使わせてもらい本文中の括弧内に頁数を付す。
- (5) 本作品でのコルシカの民族文化や風習について、メリメが参考にした古今の文献に関する研究論文にGisele Mathieu-Castellani, "Mérimée et la Corse", *Littératures* 51 (2004), 95-115がある。メリメは執筆の一年前に遺跡調査官として自らもコルシカに渡っている。
- (6) メリメはネヴィル大佐の人物像をGeorge-Lionel Dawson Damer (一七八八生まれ)という実在のイギリス人大佐を念頭に形成した。Gallimard版テクストNotes (六二九頁)参照。
- (7) 当時、マルセイユからコルシカへの船便は週二本で、一本は北部バステリアに、もう一本は西部アジャクシオに向けて出港した。

(8) 中心人物となる青年の名前を決めるにあたって、「歴史上実在しない、コルシカの名門出にふさわしい、品格を備えた、心地よい響きをもつ」名前を推薦してほしいとコルシカ史家 G. G. Gagoni にメリメが相談したことが知られている。Gallimard 版テキスト Notes (六三二頁) 参照。
のちにリディアはこの青年を「山の熊」と呼ぶが、オルソ Orso はイタリア語で「熊」のことである。

(9) コルシカ人船長とオルソが互いの会話をイギリス側に聞かれまいと警戒するこの場面で、二人はイタリア語で会話をしている。当時フランス政府は「イタリア語駆逐」運動を強力に進めていたが、逆に言えば、それはイタリア語が深く浸透していたことの証左である。ここでは、コルシカで実際に庶民の言語使用状況を見聞したメリメが島の実態を映し出すべくこうした場面を導入したと考えられる。島での言語政策について、十九世紀初めの「公務員採用にはフランス語使用能力を前提条件にすべし」と言う通達³³などについて、右掲長谷川『コルシカの形成』(二六頁) 参照。

(10) コルシカ独特の生態系である「マキ」については後段で一章を設けて論じている。

(11) オルソは中等教育をイタリアで受けたからダンテのイタリア語詩の素養がある。十九世紀前半当時のコルシカには、フランス政府の仏語政策に対するに、島における長年のイタリア文化との関係を重視する知識人によるイタリア語運動も見られた。オルソによるダンテ朗誦のこの場面には言語文化に関するメリメの文学者らしい関心と観察を読み取ることができる。右掲長谷川『コルシカの形成』(二六―七) 頁参照。

(12) オルソは「またもとの野蛮人になるような気がしてならない」(六〇) と自己の「文明開化」度についての不安をリディアに漏らしていた。この時、彼に必要なのは自信でありリディアからの確認だったから、この発言はオルソのその気持ちを逆なでするものである。

(13) こうしたいわゆる端役の名前に関しても、メリメは文献に当たったり歴史書を読んだりして周到に「コルシカらしさ」を出そうとした。コルシカ人の名前は島固有のものである事実からもメリメは調査を必要としたのである。

(14) イギリス人親子と出会ってまもなく、オルソは「コルシカ人にはけっしてお金をやらない」(三五) ように忠告した。近代経済システムに呑み込まれていないコルシカの「無垢」を想定する台詞と見てとれる。